

ゴール型教材と「密」との関わりに関する研究

発表者 菅谷 匠吾
指導教員 大津 展子

キーワード：「密」、ゴール型教材、感染症対策

1. 緒言

新型コロナウイルス (COVID-19) 感染症の世界的な流行は、社会全体に大きな影響を及ぼしている。このコロナ禍で私たちは、「密閉・密集・密接」の3密を避けて生活をしていかなければならない¹⁾。厚生労働省のHPに掲載されている「新しい生活様式の実践例」には、「人との間隔は、できるだけ2m (最低1m) 空ける」、「会話をする際は、可能な限り真正面を避ける」などの行動を実践していく必要があると記載されている²⁾。

しかし、学校教育の体育授業の中でそれらの対策を実践することは可能なのだろうか。西田 (2020) は、学校体育で扱われる運動・スポーツはそもそも3密を前提としており、コロナ禍では体育に制限を加える必要があるが、その制限の大きさのあまり、運動・スポーツの面白さに子どもたちが触れられず、教育活動が充実しないのではないかと述べている。そこで西田は、子どもたちの安全を確保しつつ、教育活動を充実させるためにはどのような教材・種目が最適であるかを明らかにするために、体育授業における感染リスクに鑑みて、授業で扱う様々な教材・種目の評価を試みた結果、攻守入り乱れ型 (ゴール型) の教材・種目の感染リスクが高いということを明らかにしている³⁾。

そこで本研究では、様々なゴール型教材のゲームを比較し、感染リスクの低いゴール型教材はどのような教材・特徴があるのか、また感染リスクの高いゴール型教材の内容を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2-1 対象

1 大学の大学生 10 名 (4 年生 6 名、3 年生 4 名)。
ゴール型競技経験者 2 名 (ラグビー経験者 1 名、サッカー・ハンドボール経験者 1 名)、ゴール型競技未経験者 8 名。

2-2 実験期間

実験期間 令和 3 年 11 月 15 日から令和 3 年 12 月 15 日

2-3 データ収集の方法

対象者が行っている体育教材のメインゲームの場面をビデオカメラで撮影を行った。その VTR 映像を対象としてゲーム中の「密」の回数、「密」の時間 (秒数)、「密」の時間の割合の 3 項目を、フラッグフットボール、タグラグビー、セストボール、スリーサークルボール、エリアボールの 5 つの教材で明らかにした。これらの教材の選定基準は、先行研究でゴール型の技能を高めるのに有効であると明らかにされているものとした。

この研究における「密」の定義は、厚生労働省の公式 HP の「新しい生活様式の実践例」に記載されている、「人との間隔はできるだけ 2m (最低 1m) 空け、可能な限り真正面を避ける」という文言に基づ

き、「複数名が 1m 以内の距離で、真正面を向かい合うこと」とした。また、高橋 (2003) が定義した「よい体育授業」の「運動学習場面が授業時間の 50% 以上」という文言に基づき、この研究のメインゲームの時間を以下の表 1 の通りに設定した⁴⁾。

表 1 ゲーム内容と試合数

教材	フラッグフットボール	タグラグビー	セストボール	スリーサークルボール	エリアボール
1試合の内容	攻撃4回 守備4回	前半4分 後半4分	前半4分 後半4分	攻撃1分2回 守備1分2回	攻撃4分1回 守備4分1回
試合数	2	1	1	2	1

3. 結果

3-1 「密」の回数

図 1 で分かるように、最も「密」の回数が多かったゲームはセストボールであった。次いで、エリアボール、タグラグビー、スリーサークルとなり、最も回数が少なかったフラッグフットボールは、セストボールと比較すると、半分以下の数値となった。

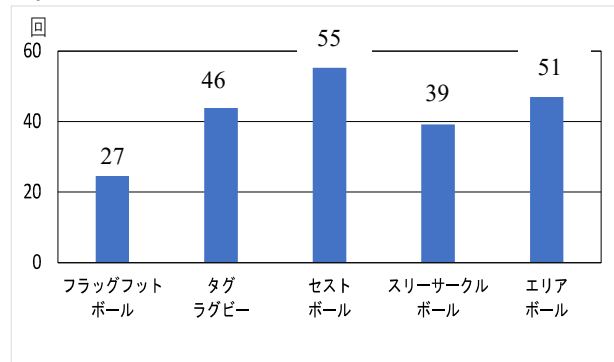


図 1 「密」の回数

3-2 「密」の時間 (秒数)

図 2 で分かるように、「密」の回数の結果と同様に、タグラグビー、セストボール、エリアボールが上位の 3 教材となった。また、フラッグフットボールの「密」の時間が他の教材と比較すると極端に少ないことが明らかとなった。

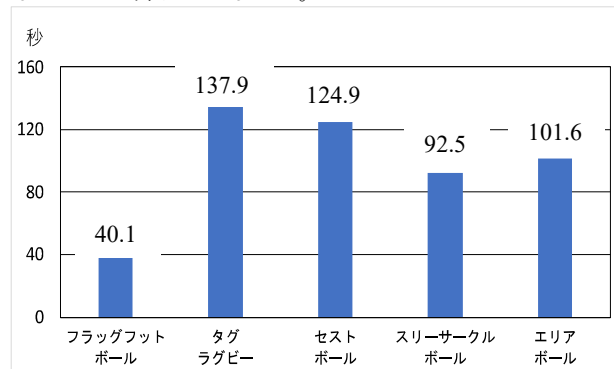


図 2 「密」の時間 (秒数)

3-3 試合時間における「密」の時間の割合

図3で分かるように、最も「密」の割合が大きかったのはラグラグビーであった。次いで、フラッグフットボール、セストボールとなった。「密」の回数・時間の結果との差異は、フラッグフットボールが5つの教材の中で2位という上位に位置しているという点である。

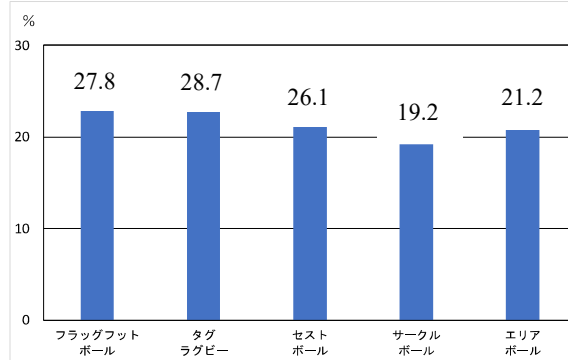


図3 「密」の割合

4. 考察

4-1 フラッグフットボール

「密」の回数・時間から、フラッグフットボールが最も感染リスクの低い教材であるような結果であったが、実際の活動時間における「密」の時間の割合が5つの教材の中で2位であった原因は、運動学習時間が確保できていないためだと考えられる。このことから、フラッグフットボールは感染リスクが低い教材とは言えない。フラッグフットボールでは、守備側が攻撃側のタグを取りに行く際に複数名が接近すること、攻撃側が全員で密集してボールを隠し、ボール保持者がわからないようにするという作戦を多用することが、「密」の生まれる原因であると考えられる。フラッグフットボールの「密」を避けるための改善点は、タグを取る代わりにボール保持者にタッチをするという行為に変更し、複数名が接近する時間を抑えること、攻撃側の作戦に制限を加えることが考えられる。

4-2 タグラグビー

タグラグビーが分析した3項目の全てにおいて上位に位置した原因は、守備側が攻撃側のタグを取りに行く際に複数名が接近すること、オープンナンバー制であるためにマンツーマンディフェンスがゲーム内で行われ、複数名が真正面向き合う場面が頻繁に起こることだと考えられる。タグラグビーの「密」を避けるための改善点は、タグを取る代わりにボール保持者にタッチをするという行為に変更すること、アウトナンバー制を取り入れて複数名が接近する回数や時間を抑えることが考えられる。

4-3 セストボール

セストボールが分析した3項目の全てにおいて上位に位置した原因は、オープンナンバー制であるためにマンツーマンディフェンスがゲーム内で行われ、複数名が真正面向き合う場面が頻繁に起こること、ゴール付近で守備側がサッカーのキーパーのような役割をすることができ、ゴール付近で攻撃側と守備側が真正面向き合う場面が頻繁に起こることが考えられる。セストボールの「密」

を避けるための改善点は、アウトナンバー制を取り入れて複数名が接近する回数や時間を抑えること、ゴールエリアに人が入って守るのではなく、障害物を置くことが考えられる。

4-4 エリアボール

エリアボールの「密」の回数・時間の結果が上位に位置した原因は、5つの教材の中で最もコートが狭く、ボール保持者が味方にパスを出した瞬間にボールを攻撃側と守備側で取り合い、集中的に「密」が生まれることが考えられる。しかし、「密」の割合の結果では5つの教材の中で4位という下位に位置していた。その理由としては、コートが9つのエリアに区切られており、「1エリアにプレイヤーは1人しか入ることができない」、「ディフェンスはボール保持者から1m以上離れる」というルールが設定されているため、パスを出した瞬間にのみ人が集まり「密」が生まれているためだと考えられる。エリアボールの「密」を避けるための改善点は、コートを広くし、エリアを大きくすることが考えられる。

4-5 スリーサークルボール

スリーサークルボールが分析した3項目の全てにおいて下位に位置した理由は、攻守交代制であることと1回のゲームの時間が1分と限られていることでゲーム展開がスピーディーとなり、攻守が膠着状態になりにくいこと、アウトナンバー制であること、「同じサークルでの連続得点は認められない」というルールがあり、得点をした直後に素早く別のサークルに移動をしなければならないために「密」が生まれにくかったことが考えられる。したがって、本研究で扱った5つの教材の中でスリーサークルボールが最も感染リスクが低いと考えられる。

5. まとめ

本研究では、スリーサークルボールが5つの教材の中で最も感染リスクが低いということが明らかとなった。感染リスクが低い教材の特徴としては、「攻守交代制」、「アウトナンバー制」、「密の生まれにくいルール設定」が挙げられる。感染リスクが高いと考えられる教材には以上の3点を取り入れ、感染症対策を十分に行いながら、体育授業をするべきであると考えられる。また、スリーサークルボールを発展させ、コートを拡大した「ファイブサークルボール」、足を使って行う「サッカーサークルボール」など、新たな教材の開発に取り組んでいきたいと考える。

文献

- 1) 首相官邸「3つの密を避けましょう」検索日2021年11月2日
<http://www.kantei.go.jp/jp/content/000061868.pdf>
- 2) 厚生労働省「新しい生活様式の実践例」検索日2021年11月2日
<http://www.mhlw.go.jp/content/000641913.pdf>
- 3) 西田佳「3密を避ける？私の体育授業アイデア」、『体育科教育2020年08月号』大修館書店,p42-46,2020.
- 4) 高橋健夫『体育授業を観察評価する～授業改善のためのオーセンティック・アセスメント～』昭和出版,2003.